

[研究ノート]

天災人災の発生と人類の文明に関する倫理的考察

—新型コロナ肺炎にちなんで—

于 振忠

はじめに

「時に、初春の令月にして、気淑く風和ぎ」という素晴らしい季節に、日本の元号は「平成」から「令和」へと変わった。

そのころ筆者は、重病からやっと回復したとはいえ体の状態がまだ元に戻らぬまま、1年間近くも暗闇に包まれていた時であった。だが、元号の「令和」が『万葉集』に由来しており、人々が美しく心を寄せ合う中でこそ文化が生まれ育つという意味である、との説明を聞いた瞬間に、とても新鮮に感じ、目の前もぱっと明るくなり、希望の燈が灯されるような気がしたのであった。

こうして、日本における改元とともに暗闇から抜け出ることができた筆者は、「世界の国のすべてが、老いたる人も若い人もみな、明日への希望を映かせる国々になりますように」という祈りを込めた言葉で自分を激励しながら、己の職務の新たなスタートを切ったのであった。

まず取り組むべき職務は、その1ヶ月後に開催される中国の沙漠緑化に参加する日中の青年の受け入れ準備であった。一般社団法人倫理研究所が「地球倫理の推進」の一環として20年以上取り組んでいる日中青年による沙漠緑化と交流会には、両国から毎年大勢の青年が参加して素晴らしいパワーを発揮する。そのパワーを存分にいただきながら、この「令和元年」を機に、新たな気持ちで頑張ろう、と筆者は心に決めたのであった。

ところでしかし、一方で「時に、初春の令月にして、気淑く風和ぎ」があれば、もう一方では「雪積もり、身に沁みる冬の厳しさ」もあるのが世の常である。2019年9月から5ヶ月以上も続くオーストラリアの山火事がそれであり、10月に日本を襲った超大型台風、12月に武漢に源を発して、燎原の火の勢いで世界に広がる新型コロナウイルスによる肺炎の拡大、1万4千人も死者が出ているアメリカのインフルエンザ、アメリカとイランとの軍事的対峙、信仰の違いによる中東の民族紛争など、今や天災人災頻発の大変動の時代に突入しているのである。

私たちの住む地球にはもともと、国境もなく民族の違いもなく、争いもなかったが、人類文明の発達につれて、様々な危機を招くようになった。拙論では、人類文明の進化のプロセスにおいて生じた危機について、中国古代思想における人類の危機の原因という観点から考察していきたいと思う。